特集

深い学びを支える学校図書館

「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、今後、学校図書館の役割がますます重要になるといわれています。そこで今回は、深い学びを支える場としての学校図書館を取り上げます。運営のしかた、効果的な活用のしかたなどについて、司書教諭の先生や学校司書の方にお伺いしました。

これからの学校図書館 Q&A

新しい学習指導要領のもと、学校図書館をどのように活用していけばよいのか、田揚江里先生（日本女子大学非常勤講師・元狛江市立緑野小学校司書教諭）にお伺いしました。

Q 学校図書館とは、そもそもどのような役割を担っているのでしょうか。

A

なぜ学校には図書館が設置されているのでしょう。学校図書館は学校にあるミニ公共図書館ではありません。学校図書館法第二条では学校図書館を「学校の教育課程の展開に寄与する」と定義しています。静かに本を読む場と考えられてきた図書館を、「学習センター」「情報センター」の機能も有し、子どもたちが資料活用や探究のスキルを学び学習活動をする場にしなければなりません。

学校図書館は、次の三つの機能を有する施設です。

- **読書センター**
  子どもたちと本の出会いをさまざまな手立てを工夫してコーディネートし、全教育課程を見通した読書指導計画を作成し、推進して読書の力を培う。
- **学習センター**
  学習を支える資料や、図書館で学習が行えるような黒板などの整備をはじめ、学習活動への支援、教職員の教材研究のためのさまざまな支援を行う。
- **情報センター**
  子どもたちの情報リテラシーを育成し、さまざまなメディアを活用して学習することへの支援を行う。

総合的な学習をはじめ各教科の学習も学校図書館が機能しなくては深まりをもてないのです。そのために、学校図書館の利活用を推進する司書教諭が配置されています。さらに、学校司書配置を加速化する動きもでてきています。

Q 「学校図書館を活用して授業を豊かに」といわれていますが、効果的な活用のしかたを教えてください。

A

例えば、説明的文章は、読み込んでいくと問いがたくさん生まれます。

主体的な学習がなされていないと、問いも課題も生まれません。その問いを解決するために学校図書館はあります。しかし、すばらしい図書館があったとしても、それらを活用するスキルを身につけていなければ意味がありません。図鑑、百科事典、国語辞典、漢字辞典、年鑑を必要に応じて使用する、目次から見当をつけて探すなどのスキル指導が必要です。

国語の教科書にはそういった単元が組み込まれていますが、それとあわせて、資料活用のスキル指導や、レポートの指導、思考を育てる過程が紹介されている本などを参考にされるとよいと思います。

学校司書が配置されている自治体では、「図書の時間」に協働して指導を行う学校が増えています。未配置の場合は学区域の公共図書館に問い合わせて指導用資料の貸し出しを受けたり、リストをもらったりするなど日常的に連携を進めていきましょう。調べたい情報を見つけ、自分の知の世界が広がることは楽しいことです。子どもたちが、分かる楽しさを実感できるように準備をしましょう。

Q どうすれば、子どもたちが学校図書館を主体的に活用するようになるのでしょうか。

A まず、日頃の授業が「問いの生まれる授業」になっているでしょうか。

まずはそれらを調べることから始めてもよいでしょう。子どもたちが図書館で調べることに慣れていない場合は、関連した資料を図書館から選び学級に配架する方法もあります。そのとき、教師が必ず資料に目を通すことが必要です。教師自身の教材研究になりますし、何よりも子ども向けと思っていた資料が、実は大人にとっても新しい発見をもたらすレベルの高い内容であることを実感されるはずです。

また、国語の教科書には、並行読書や調べ学習を促す単元がありますが、大切なことは、まずは土台となる本文を丁寧に学習することです。図書館活用のために本文があるのではありません。この単元を通して培う力や、調べる学習にその力がどうつながるのかをはっきりさせた授業を組むことにより、子どもたちの資料を読む視点が定まり、情報が探しやすくなります。

Q 子どもたちの読書量を増やしたいのですが、よい手立てがあったら教えてください。

A 読書量を増やすためには、子どもたちを読書好きにすることです。そのためのポイントは五つあると考えます。

①本を読む時間を保障する。
②連続した読み聞かせをする。
③自分の学年または一学年下の国語の教科書をすらすら読めるようにする。
④おもしろいと感じる本に出会わせる。
⑤担任が絵本や児童文学を読んでいる。

①「朝読」などを設定して、学級で毎日五～十分間の読書をすることをお勧めします。読書の苦手な子どもたちはお話の世界に入ることや、集中すること自体が苦手な場合も多いので、短時間で集中させ終わらせます。読む本は事前に手元に用意させましょう。初めはイメージを描く力を育てるために9類(文学)の本に限るとよいと思います。おもしろくなってくると先が読みたくて、ちょっとしたすき間の時間にも読むようになります。

②担任の連続読み聞かせも効果があります。長編物でも、次はその本を自分で読みたくなります。さまざまな調査でも、本を読むきっかけは「担任に紹介されたから」が多くの回答を占めます。

③お話を読んでもらうのは好き、でも自分では読めない子どもがいます。そんな子はたいてい、文をすらすら読むのが苦手です。家庭と連携するなどして、すらすら読む力を並行して育てなければなりません。

④は③とは逆に、すらすら読めるけれど、読まない子です。子どもたちにとって内容が分からないまま背表紙から選書をすることは、かなり高度なことです。そんなときは個に合わせて「これ読んでみない?」とお話の内容をちょっと話して紹介する、友達どうしのお薦め本の交流も効果的です。学校司書が配置されていればプロの力を借りましょう。

⑤は①～④までに関わることでいちばんのポイントです。毎日の読書の時間に、子どもたちがどんな本を読んでいるか観察すると、一人一人の読書のレベルが分かります。どんな本を読み聞かせすれば、子どもたちが頭の中にイメージが描けるか、その子の読書の力を見極め、興味や関心と合わせてどんな本がお薦めか、教師自身がたくさんの本の引き出しをもっていることが求められます。初めは学校司書や公共図書館の司書に選書を相談するとよいでしょう。

Q 新しい学習指導要領のもとで、特に心がけるべきことは何でしょうか。

A 「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、学校図書館の利活用は不可欠です。探究型の学習がますます求められます。しかし、学校図書館の機能を使いこなせる手立てを一人一人の教師が身につけていなければ学校図書館活用は進みません。校内で探究型学習のプロセスや手立てを研修する機会を増やす必要があります。

＊　＊

学校図書館の実態はさまざまです。学校司書が未配置の場合、図書館の整備も十分ではないかもしれません。また、活用したくても資料が足りない場合もあります。そんなときは公共図書館との連携をお勧めします。

公共図書館に「使用学年」「単元の概略」「資料活用で育てたい力」などを伝え、学級の人数の二倍くらいの資料の貸出を依頼します。公共図書館の中にはその地区で使用している教科書を備え、内容を見ながら資料提供を行う図書館もあります。資料だけでなく、ブックトークやアニマシオンも、教師ができない場合は公共図書館のプロの力を頼りましょう。そのうえで自校の学校図書館整備に学校全体で取り組んでください。

田揚江里(たあげえり)

公立小学校に，再任用も含め41年間勤務。司書教諭として，学校図書館の整備・充実に努める。現在は，学校図書館を利活用した学習指導法の講義や講演のほか，勤務校であった緑野小学校では学校図書館スーパーバイザーとして，さまざまな支援にあたっている。